

2021年を振り返って

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男

まもなく2021年が終わりますが、不安定な社会情勢が続き、人々の心も経済活動も回復とは言えない1年でした。そのような状況下でも、我々健育会グループはワンチームで一丸となり、ほぼ最善の取り組みを行い、新たなことにも挑戦しました。改めてこの1年間を振り返り、今、私が感じていることをお話しします。

対策を講じる矢先、グループ内でクラスターが発生



昨年12月に「感染対策チーム」を創設しようと動き始めた直後に、ねりま健育会病院にて大規模クラスターが出てしまい、なんと慌ただしい年明けとなりました。東京都と区の指導を受けながら無事に終息しましたが、3月には西伊豆のしおさいでもクラスターが発生。グループにとって、非常に大きな打撃を受けた上半期でした。しかし、職員やスタッフの努力や支援があったからこそ、グループ全体で事態を乗り切ることができました。その後も順調に運営できたのはまさにグループ全体がワンチームに結束できたからだと思います。

スタッフ・職員の安全を守りながら、最善を検討

医療従事者が大変な状況でありながらも、今年は83名の方が永年勤続（10年55名、20年26名、30年2名）の対象となり、さらに125名の新社会人が入社してくれました。長く勤務いただけること、また数ある中から健育会グループを選んでくださったことは、非常にうれしく、喜ばしいことでした。



みなさんに安心して働いていただけるよう、健育会では4月からワクチン接種を開始。6月までにはほとんどの職員・スタッフへの接種が完了しました。



常に社会情勢や病院・施設の状況・社会情勢を観察し、何度もミーティングを開きました。6月にはコロナ特集のテレビ番組からヒントを得て、放送の翌日に集合。パンデミックで浮き彫りとなった、今後の病院・施設の課題について、対応を協議しました。

歴史的イベントを通じて再認識した使命



7～8月にかけて夏季オリンピック・パラリンピック東京大会が開催。なかでも私はパラリンピックを通じ、障害者が生活する環境など医療人としての使命を改めて考えさせられました。素晴らしい大会ではありましたが、感染拡大など代償も少なくありません。



また10月には衆議院議員総選挙が行われました。私が注目したのは国の財政です。医療崩壊にも繋がりがねない状況を国民はどう判断するのか…。蓋を開けてみると、有権者がしっかり将来を見据えた結果だったと思います。

この大きな出来事は、我々、民間施設が今なすべきことは何か、社会貢献のために何ができるか――振り返った上で、健育会が目指す方向は「間違っていない」と再認識する機会となりました。

石川島記念病院、西伊豆健育会病院でコロナ受け入れ体制を整備



コロナ感染の最大規模ともいえる第5波が到来したのは8月。健育会では9月には2施設でコロナ患者受け入れ体制を整備していました。9月21日に西伊豆健育会病院で専用病床を2床新設。27日にはリハビリテーション病院であった石川島記念病院は18床の中等症患者専門病院として開始しました。8月の第5波による悲惨な状況を見ての決断でした。



9月24日には、当時の西村康稔経済再生担当大臣が石川島記念病院を視察訪問されました。多くのメディアにも取り上げられ、いかに注目を集めたかが表れていたと思います。

グループに浸透する“健育会イズム”を感じた1年



この1年、オンライン形式ではありましたが「TQM活動発表セミナー（2月）」や「看護・リハビリテーション研究会（3月）」「チーム医療症例検討会（7月）」など、教育・研修は例年通りに開催できました。みなさんの発表はとて素晴らしいものばかりで、私が考える健育会のあるべき姿・目指すビジョン、いわば“健育会イズム”がみなさんにも正しく伝わっていることを実感しました。



春以降、グループ内施設でクラスターは出ませんでした。感染を未然に防げた結果です。大変な状況が続きましたが、みなさんが「ONE TEAM」となって最善の取り組みができた1年であったと感じています。

69年目を迎える2022年、健育会が掲げるテーマは「豊かな心でチャレンジ」。スピード感を失わず、すべての方の尊厳を尊重し、愛情をもって親身に対応することを約束いたします。